

4 母音変異複数

foot に対して *feet*, *mouse* に対して *mice* のような「不規則変化」を示す名詞の複数形の由来を示す。Sapir (1921: 174) によれば、英語の *foot*, *feet*, *mouse*, *mice* は初期の西ゲルマン祖語の **fot*, **foti*, **mus*, **musi* に由来し、強勢は第1音節に置かれ、第1音節の母音は長母音である。母音を音声記号で表すと、**f[ó:]t*, **f[ó:]t-[i]*, **m[ú:]s*, **m[ú:]s-[i]* である。現代英語では、それぞれ、*f[ʊ]t*, *f[i:]t*, *m[á]s*, *m[ái]s* と発音される。

feet の母音は [ó:] から [i:] へ、*mice* の母音は [ú:] から [ái] へ変化した。この変化に関与したのは、(1) 硬口蓋音性 (palatality) の同化、(2) 硬口蓋母音の弱化、(3) 弱化した硬口蓋母音の消失、(4) 硬口蓋唇母音の脱唇音化の4つの音の置き換えと大母音推移 (Great Vowel Shift) である。いずれにおいても、強勢が重要な役割を果たしている。*feet* の母音の由来は、[ó:]--(1)→[ó:]--(2)→[ø:]--(3)→[ó:]--(4)→[é:]--大母音推移→[i:] である。また、*mice* の母音の由来は、[ú:]--(1)→[ý:]--(2)→[ý:]--(3)→[ý:]--(4)→[i:]--大母音推移→[ái] である。強勢を軸として、それぞれの音の置き換え、大母音推移を見ていくことにする。

(1) *f[ó:]t-[i]* は *f[ø:]t-[i]* へ、また、*m[ú:]s-[i]* は *m[ý:]s-[i]* へ置き換わる。

関与している音韻過程は、硬口蓋音性の同化 (palatal umlaut) である。強勢から次の強勢までのまとまりがビートである。この例では語という単位が1ビートである。**f[ó:]t*, **f[ó:]t-[i]*, **m[ú:]s*, **m[ú:]s-[i]*, それぞれは1ビートで発音される。この例ではビートが同化の領域である。同じビート内で後ろにくる母音が硬口蓋母音の時、前にくる母音は硬口蓋母音になる。つまり、硬口蓋音性の逆行同化である。調音の仕方は、前にくる母音に硬口蓋音性が加わるので、[o:] および、[u:] を発音しながら舌全体を前に動かすと、それぞれ、[ø:], [y:] という硬口蓋唇母音が発音される。

(2) *f[ø:]t-[i]* は *f[ø:]t-[ə]* へ、また、*m[ý:]s-[i]* は *m[ý:]s-[ə]* へ置き換わる。

関与している音韻過程は、硬口蓋母音の弱化である。強勢を受けていない硬口蓋母音は、硬口蓋性を失い硬口蓋母音でなくなる。*f[ø:]t-[i]* および *m[ý:]s-[i]* は、それぞれ、1ビートで発音される。前にくる母音が強勢を受けるため長く、全体が1ビートなので、後ろにくる母音はその分短くなる。長さの比は約3:1。無強勢母音に割り振られる時間は極めて短い。硬口蓋音性といった明確な音色を出すための調音 (舌全体を前に動かす) に十分な時間がかけられないため、/i/ を発音しようとしても、明確な音色を持たない [ə] が発音される。

(3) $f[\acute{o}:t-[\acute{a}]$ は $f[\acute{o}:t]$ へ、また、 $m[\acute{y}:s-[\acute{a}]$ は $m[\acute{y}:s]$ へ置き換わる。

関与している音韻過程は、弱化した非硬口蓋母音 $[\acute{a}]$ の消失である。強勢を受けていないことで硬口蓋性を失い、硬口蓋母音ではなくなった母音は消失する。

(4) $f[\acute{o}:t]$ は $f[\acute{e}:t]$ へ、また、 $m[\acute{y}:s]$ は $m[\acute{i}:s]$ へ置き換わる。

関与している音韻過程は、硬口蓋唇母音の脱唇音化=非円唇化である。硬口蓋唇母音は唇音性を失う。硬口蓋音性と唇音性の関係は、相手の音響的效果を弱めてしまうという相反する関係である（舌全体を前方に動かし、前舌面を硬口蓋に近づけると口腔の前側の大きさが減少する。一方、唇を丸めると口腔の大きさが増大する）。それゆえ、硬口蓋音性と唇音性の両方を備えた母音、例えば、 $[y]$ は硬口蓋音性を取り除き $[u]$ に置き換えられたり、または、 $[y]$ は唇音性を取り除き $[i]$ に置き換えられたりすることが多い。この例では唇音性を取り除いている。調音の仕方は、 $[\acute{o}:]$ および $[\acute{y}:]$ を発音しながら唇の丸めを取り去ると、それぞれ、 $[e:]$ 、 $[i:]$ という硬口蓋母音が発音される。Sapir (1921: 175-176) によれば、 $m[\acute{y}:s]$ から $m[\acute{i}:s]$ への脱唇音化はおおよそ 1050 年から 1100 年の間に起こり、 $f[\acute{o}:t]$ から $f[\acute{e}:t]$ への脱唇音化よりも数世紀遅れて起こったとのことである。

$f[\acute{e}:t]$ が $f[\acute{i}:t]$ と、 $m[\acute{i}:s]$ が $m[\acute{ái}:s]$ と現代英語で発音されるようになるまでには、1400 年代にはじまり 1600 年代に完了した大母音推移の一連の音の置き換えが関与している。 $[\acute{æ}]$ --㊦→ $[e]$ --㊩→ $[i]$ (= $[ij]$)--㊵→ $[ij]$ --㊥→ $[ei]$ --㊦→ $[\Lambda i]$ --㊧→ $[ai]$ である。これらは強勢を受けた母音にのみ生じた。 $f[\acute{e}:t]$ から $f[\acute{i}:t]$ へは㊩が、 $m[\acute{i}:s]$ から $m[\acute{ái}:s]$ へは㊵、㊥、㊦、㊧が関与している（大母音推移については、「Canadian Raising と大母音推移」の項を参照）。

表 母音の音声記号と素性

	Palatal	----Palatal----		-----Non-Palatal-----		
	Labial	-----Non-Labial-----			----Labial----	
High	y	i	ɪ	ɨ	ʊ	u
Mid	ø	e	ɛ	ʌ	ɔ	o
Low	æ	æ	a	ɑ		ɒ
	Tense	Tense	-----Lax-----			Tense

(宇佐美 文雄)